

で た 男
ま っ 義
き か 岡
っ し 片
さ 優 人

新潮社

優 し か っ た

人 片 岡 義 男

新潮社

さつきまで優しかった人

発行——一九八五年六月五日

五刷——一九八五年一〇月一五日

定価——八八〇円

著者——片岡義男

発行者——佐藤亮一

発行所——株式会社新潮社

所在地——162 東京都新宿区矢来町七一

電話——「——」
業務部(03)二六六—五一—
編集部(03)二六六—五四—

振替——東京四—八〇八

印刷所——株式会社光邦

製本所——加藤製本株式会社

© 1985 Yoshio Kataoka. Printed in Japan

乱丁・落丁本は、一面倒ですが小社通信係宛にお送り下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-10-349002-0 C0093

目次

恋物語のたどる道 5

さつきまで優しかった人 15

一等星の見える窓 31

きみはただ淋しいだけ 57

右の頬に触れる指さき 91

ムーンライト・セレナーデ

装帧
平野甲賀

さつきまで優しかった人

恋物語のたどる道

夜の時間が、ゆっくりと真夜中に近づこうとしている。その夜のなかを、雨が降っている。雨足は強い。冷たい雨だ。気温も、秋のこの季節にしては、二、三度低い。

道路に雨が降っている。道路は往復二車線だ。塗りがえたばかりの白いセクター・ラインが、ところどころにある街灯の明りをうけとめて、鈍く光っている。アスファルト舗装の平凡な路面が、夜の暗さと強く降っている雨のおかげで、深い艶をたたえている。

道路の両側に、歩道がある。かつては並木があったのだが、その並木はすでにとりはらわれて、ない。歩道の縁に、白いガードレールがのびている。

進行方向左側の歩道に、ガードレールによせて、電話ボックスがひとつ、立っていた。ガラスの窓に雨が当たっている。ボックスのなかに人はいない。間隔を置いて立っている街灯と街灯との、ちょうど中間の、暗いところにその電話ボックスはある。ガラスの内側が、雨のなかに明るかった。

自動車一台、走って来た。夜の雨のなかにヘッドライトが光を放ち、濡れた路面を照

らしている。道路の両側のガードレールを、ヘッドライトの光の広がりがとらえ、浮き立たせていく。

自動車は、スピードを落とした。左のウインカーを点滅させて左へ寄つていき、徐行の速度にまでスピードを落とし、電話ボックスの前を通過した。そして、通過しおえて、停止した。ヘッドライトが消え、ワイパーがとまった。フル・サイズの、ごく平凡なセダンだった。

うしろから、さらに一台、自動車が走つて来ていた。雨に乱反射しているヘッドライトの光は、まだかなり遠かった。

停止したセダンの、運転席のドアが開いた。男性がひとり、雨のなかへ出て来た。ツイードのジャケットの、肩から背中へかけての線のたくましさによって、三〇代なかばという彼の年齢は、雨の夜の中でも、はっきりとわかった。

エンジン・フードの前を、雨に首をすくめてまわつていき、ガードレールをまたいで彼は歩道へあがった。大股に電話ボックスまで歩き、ドアを開いてなかに入った。自分がセダンで走つて来た方向を、ガラス越しに彼は見た。

こちらへ向かつて走つて来つつある自動車が、左のウインカーの点滅をはじめた。速度を落とし、浅い角度で車線の左へ寄つていった。充分に減速して、その自動車は、電話ボックスの手前でガードレールによりそつて停止した。

電話ボックスのなかからガラスごしに見ながら、彼は、頬に宿っているいくつかの雨滴を、掌でぬぐった。

ワイパーが作動している正面のガラスの向うから、運転席の女性がガラスに顔を近づけ、電話ボックスを見た。顔立ちの美しさが、電話ボックスから届く明りのなかに、浮かびあがった。

自動車を出てここへ来い、という意味のジェスチュアを、ボックスのなかの彼は、ガラスごしに彼女に対しておこなった。彼女は、小さくうなずいた。

ウィンカーを点滅させたまま、そして、作動しているワイパーをそのままに、彼女は運転席のドアを開き、外に出た。雨を髪や頬に受けながら、彼女もエンジン・フードの前をまわり、ガードレールの切れめから歩道へあがった。電話ボックスへ歩き、彼が開いてくれているドアをなかへ入った。

彼は、彼女の体を抱いた。両腕を彼女の体にまわし、力をこめて抱きよせつつ、自分の体を押しつけた。彼女は、彼に自分の体をまかせた。力をこめて自分を抱いてくる彼にこたえ、彼女は彼を抱きかえした。

ふたりは、口づけをした。ながくつづく口づけだった。

唇が離れると、すぐにまた彼のほうから、唇をかさねた。柔順に、彼女は彼の唇をうけとめていた。

何度もくりかえして、ながく口づけをつづけた。

彼女は彼の胸に片方の掌を押し当て、さらに唇をかさねようとする彼を、制した。唇のかわりに彼は彼女と頬をかさねあわせ、彼女を両腕に深く抱き、体を押しつけてじっとしていた。

抱かれている彼女の、顔のすぐ前に、窓のガラスがあった。ガラスの外を、冷静な視線で彼女は見た。

彼女の自動車が、雨に打たれていた。ワイパーが作動をつづけ、左のウインカーが規則的な点滅をくりかえした。

無言の時間が、静かに流れた。自動車がつづけて三台、雨のなかを走り去った。

「ねえ」

と、彼女が、小さな声で言った。

彼は、黙っていた。

「離して」

彼女がそう言っただけから、彼は、彼女の体を深く抱きこんでいた両腕をほどいた。彼の胸から、彼女は自分の胸を離れた。

「今日かぎりよ」

彼女が言った。

「これで、終りだわ」

「わかつてる」

「さっきから、考えてたの」

「なにを」

つぶやくように、彼が言った。

「おわかれね」

「うん」

「だから、なにか気のきいた台詞を言おうと思って」

彼女の言葉に、彼は黙ったままでいた。彼女は、淡く微笑した。

「気のきいた台詞は、でも、浮かばないわ」

彼女が、言った。

「浮かんで、どうするんだ」

「どうもしないわ」

彼は、黙って彼女の体に両腕をまわした。彼女を抱きよせ、口づけをした。彼女は、彼のするがままに、彼に体をあずけていた。

口づけがつづいた。電話ボックスに、強く雨滴が当たった。

やがて、ふたりの唇は、離れた。

「おわかれよ」

と、彼女が言った。

「わかった」

「さようなら」

彼女の言葉に、彼はうなずいた。

「このすこしさきに——」

と、体の向きを変えながら、彼女が言った。

「——すこしさきに、道路がふたまたにわかれるところがあるの」

「知ってる」

「私は、そこを、左へいくわ」

「ぼくは、右だ」

「そこで、わかれましょう」

彼は、黙っていた。片方の手の甲を、彼女の頬に触れさせた。美しい彼女の頬は、ほんのりと冷たかった。

「こうなるようになってたのよ」

「うん」

「もう、電話をしないで」

「しないでおく」

「さがしたり、しないで」

「わかった」

彼も、体の向きを変えた。片手でドアを押して開き、雨のなかに出た。彼がドアを開いたまま支え、彼女も外に出た。彼女は、ガードレールの切れめまで歩いた。そこから車道に降り、自分の自動車の前をまわり、運転席のドアへ歩いた。ドアを開き、彼女はなかに入った。

そこまで彼女を見守った彼は、ガードレールをまたいで車道に降り、セダンへもどった。運転席に入ってドアを閉めた。エンジンを始動させ、右のウインカーを彼は点滅させた。電話ボックスの手前にとまっていた彼女の自動車が発進し、ゆっくり前へ出て来た。彼のセダンの右側を通過していき、二〇メートルほど前方でいったん停止した。

彼は、自分の車を発進させた。彼女の自動車が再び発進し、スピードをあげた。彼のセダンが、そのあとにしたがった。

三分ほど走ると、前方に分岐点が見えて来た。

彼女の自動車の、左のウインカーが点滅をはじめた。それに促されたかのように、彼は右のウインカーのスイッチをオンにした。

分岐点を左側へ入っていく彼女の自動車の赤いテイル・ランプを雨の向うに見ながら、

分岐点を彼のセダンは右へ進んだ。二台の自動車は、そこでわかれた。

さきほどまで前方を走っていた彼女の車は見えなくなり、雨に濡れた二車線の路面だけが直線で雨のなかを長くのびていた。

塗りがえしたばかりの、輪郭のはっきりした白いセンター・ラインが雨に濡れ、彼のセダンのヘッドライトがそのセンター・ラインをたぐりよせては、黒い路面の中央に浮かびあがらせた。

